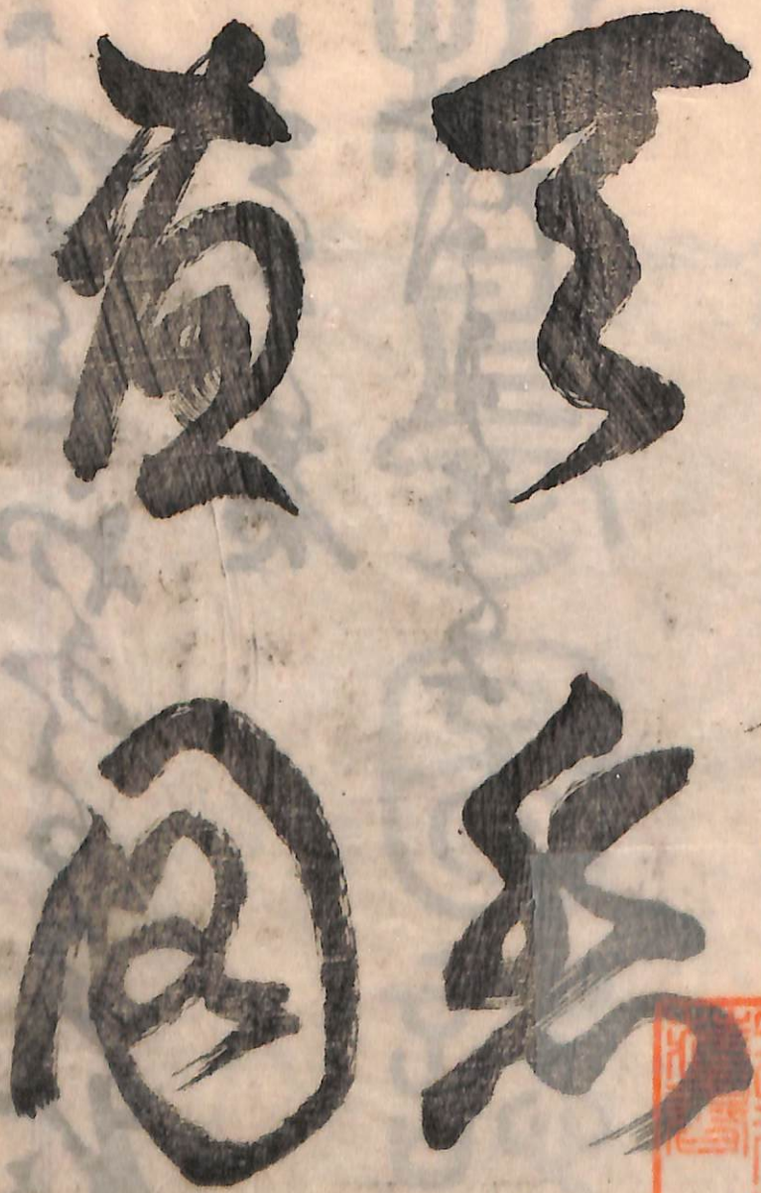
松魚圖誌

212
マ

山岡公題辭



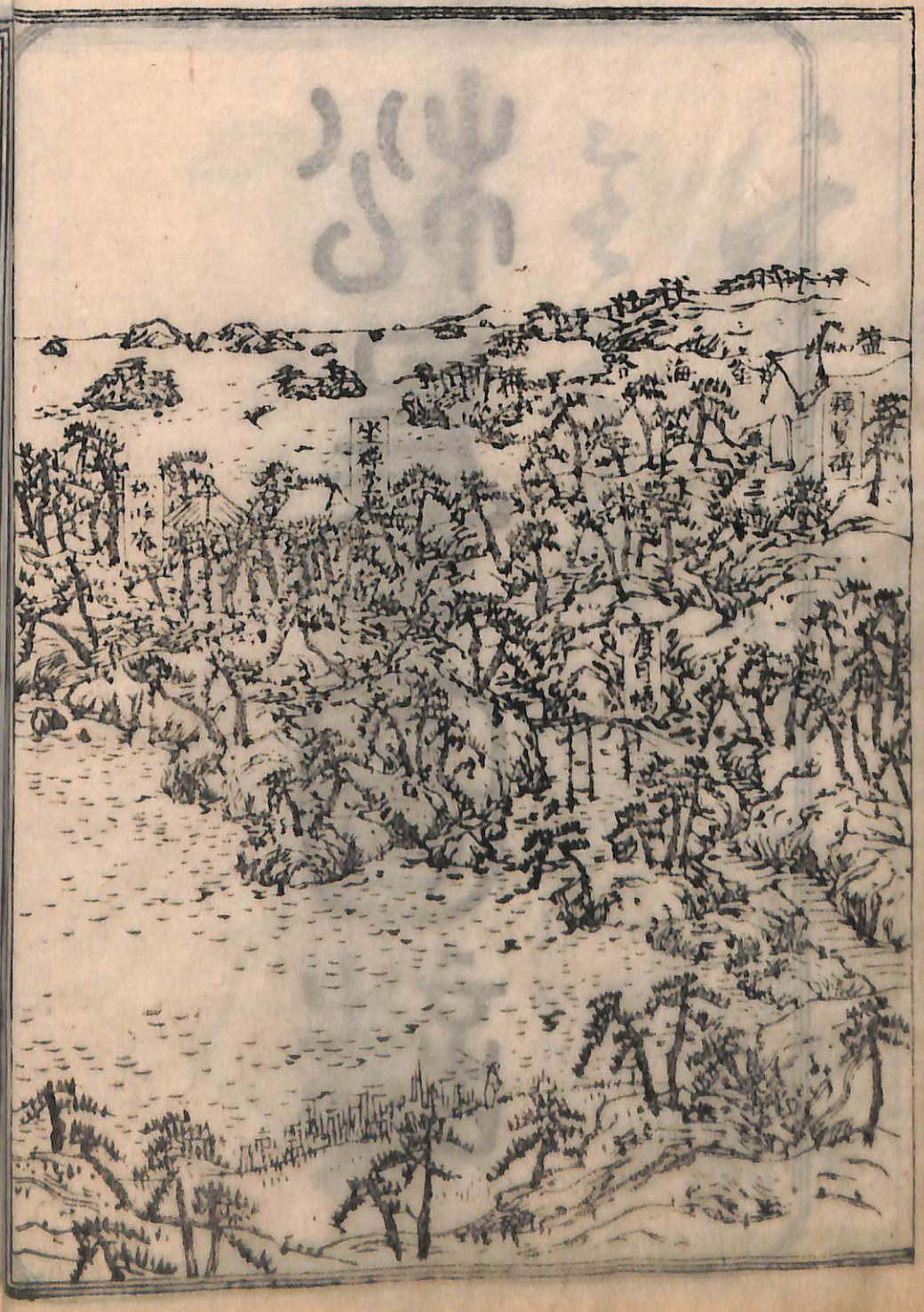
松島圖誌

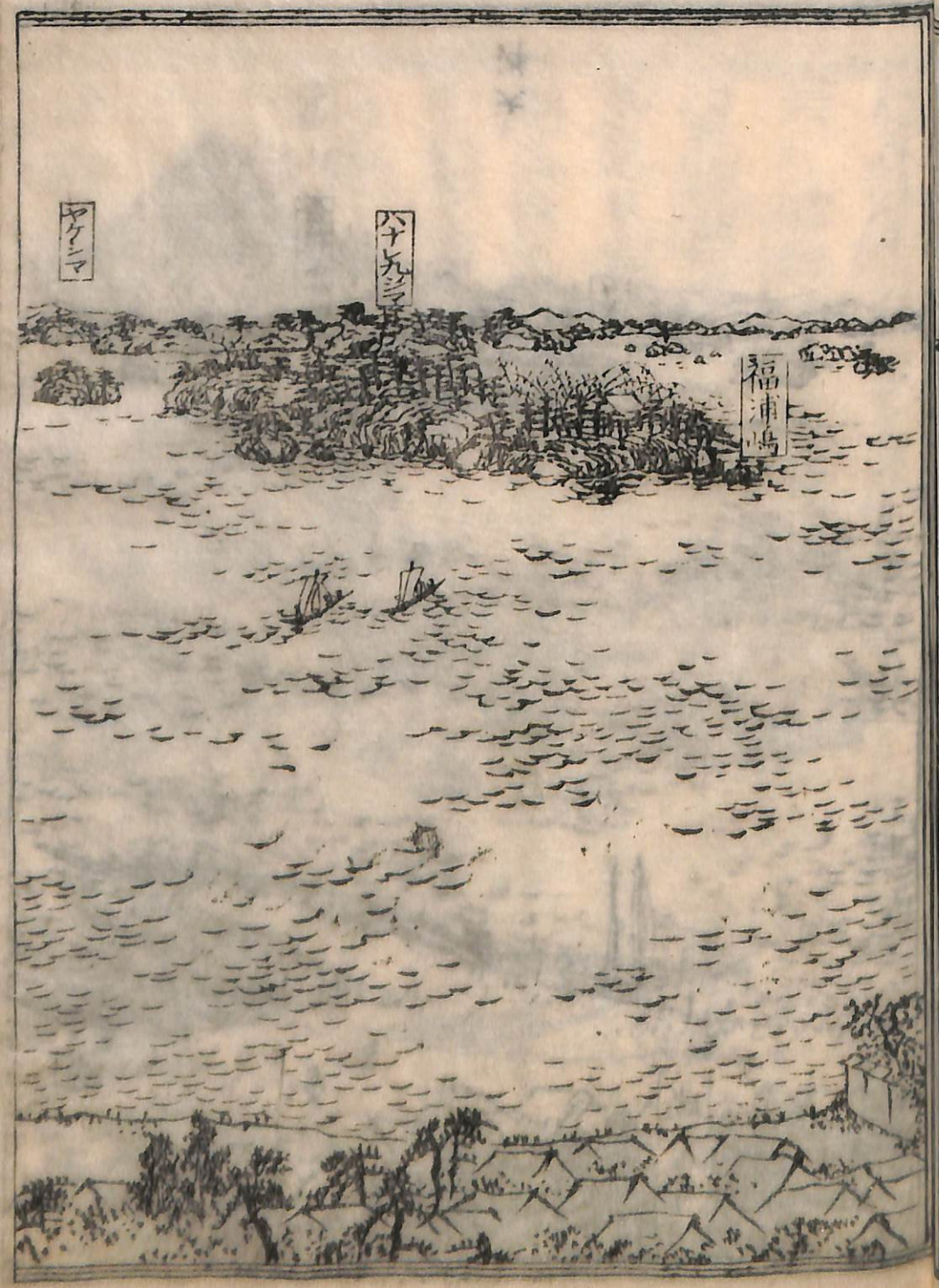
贈從二位子爵釼舟山岡公題辭
仙臺宿儒鼓五子櫻田先生著
仙臺東澤先生圖

仙臺 有千閣發兌

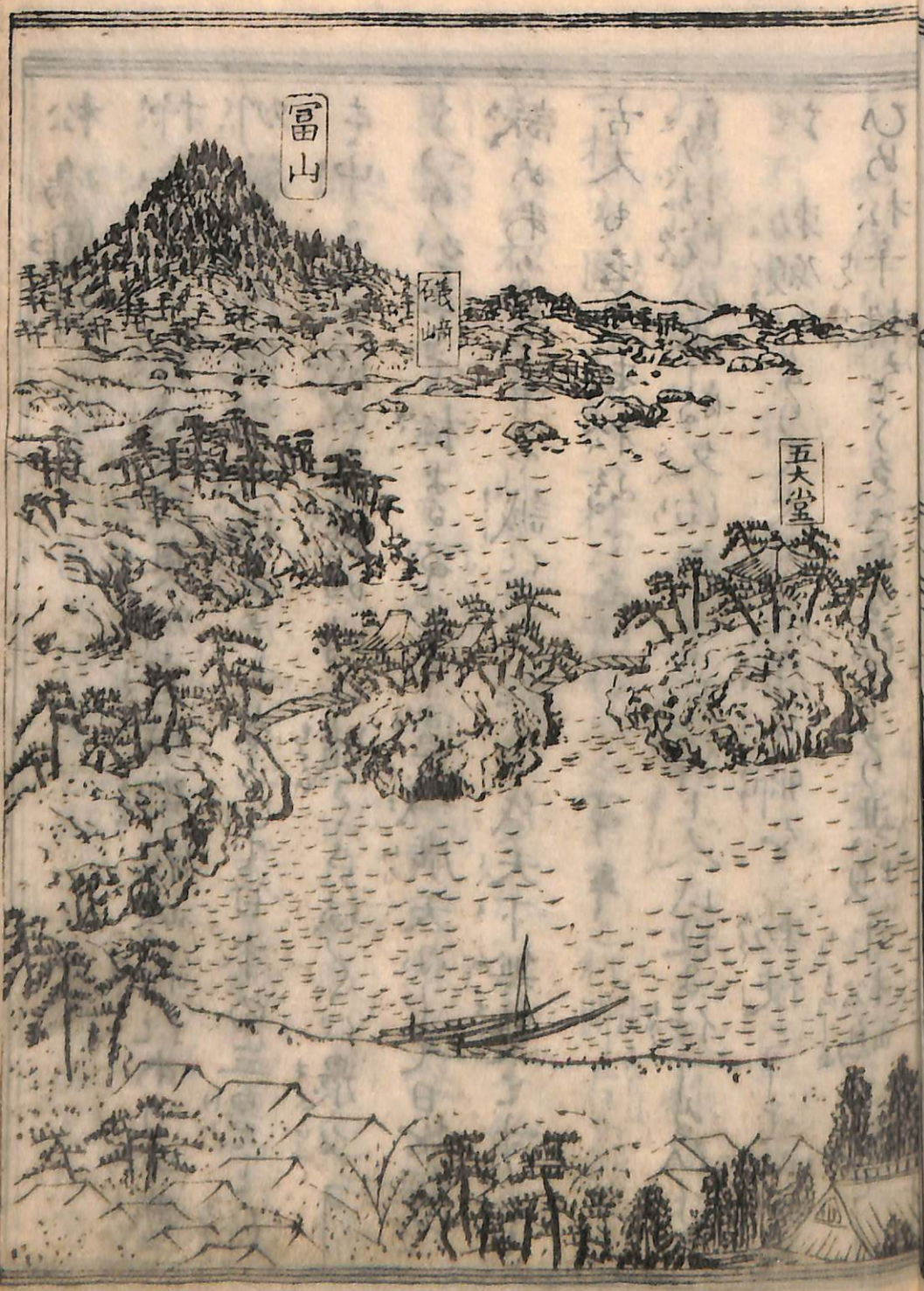
松壽圖韓

桂シマ
三子ヶ
見仏堂
小松崎


海


ヤケシマ
八十九シマ
福浦嶋

九ノシマ
紙シマ
観瀾亭


富山
五大堂

金花山
瑞巌寺

松嶋圖誌

抑名におふ松嶋は陸奥州宮城郡松嶋村にあり安藝州嚴島丹後州天橋立とおなじく日本の三景と称す中にも天成の奇絶四時ふ隨てさらにあくに晨夕すうつりかはりて極まるなく區域廣大ふして日を經て詠めあかざる事を誠にいの松島ぞ天下無雙とすべし

古人もこゝり極松嶋と名づけしるべ

鳥羽院のゆ時文治年中見佛上人此地ふ住しひとと

勅願によりて大内藏康光卿を　勅使として此所ふ

ひめ松千株をうゑさせもひてより其頃千松嶋と称せ

しゆや後を略して松嶋とよぶ古歌ふも松嶋とよいり

今ある松ハ千株万株の数をゝるべからざれども同村

社内阿弥陀山といふ所ふ勅使松とよぶもの二株ありて

一株を圍八尺餘一株ハ圍九尺余あり是即古うゑさせ

たまふ松なりとぞ此文政のはじめ凡六百九十餘年の

星霜を經るといへども弥茂り栄て緑の色殊に深し

按ずるに松嶋の名ハ文治より以前ふ和歌ふも見へたれば

此時よりはじまるなるべし或を松島の名あ

るよりて子株の松をも栽ゑしめふにゆゑるなるべし

一説或人乃案内記に達磨大師この嶋ふ来たるゆ

みゝひ大澤（松嶋の南にあり）といふ処に来らせゝふ我聖徳太子行たまひしゝ所待嶋といふ也式説は撰る時も待の字を用ふべし　鳥羽帝の御時ゝ八五六百年もすぎのゝ世ゝれども信ずるにたゝぶ○又案内記は見佛上人法嶋よて日々法華を讀誦ゝ我鎌倉の二位乃禅尼夢ゝひて天竺の佛舎利二粒姫子松千本に御文をそへて贈りゝまふゝ也松嶋といふとゝまども殺生の時ゝ多に松嶋の名ありゝ古ゝるも出ゝれば是亦信ずるにたゝぶ松嶋といふゝ總名にして其内ゝ數多の勝地靈跡あり世は八百八島ありゝなどゝふゝ大小の嶋ゝ數多ゝ有ゝといふなるべし

今は札をかゝげゝるに松嶋村は属して名のる嶋三十五あり（五大堂の島二つ并ニ甚ちひさゝ嶋我合セゝゝゝる時ゝ四十にもいのこまり）其餘他村に属して松嶋乃浦面小ゝゝなり眺望に入る島々数十は伊のまきりみな海面はおなゝびて碁掲に石をもてゝるがめくゝいづきも爭て奇狀を呈ゝ中はも古より名高ゝゝ雄嶋なり名なき小嶋ハ狂も多る所ゝ其嶋伊のきも天造の自然に出てゝおより見るとゝ後より誘むるとゝゝ面ゝ乃形我なゝゝ樟をすめ松をめぐゝ次に随ゝ千態萬大御かゝゝ尽ゝ難ゝ所ゝ有に里人といふ所どもあゝ祝ゝ名をもゝざるもありゝきべ其人ある

姿をもていたづ八百八ましいふもおろうなるべし（俚俗の説日本武尊の言とくに八百八の書のかぎくちなかめ者の沙こそ
ようつくるといふに按ずに八百八といふもおきてのうちなきとも此
言上代の人のよろこ
うもれもはきたぐ）○凡東海ゆ伊豆の雲も浪あく渺汝
はげしくしく日和よく風静なる時も浪声耳に喧
たぐ此松嶋ゆ沖表に数十の洲嶼をさくへる凡は絶て
浪なく沖面平らて徒のめく碧碌澄徹して面をうつ
し見るべし雲中は数十乃嶋くあくはさく譬ハ三千の
宮女粧を凝して宮房に列するがめく西も及ばざる示也
○此嶋松をとく名ばけて殊に松樹多しその松根を
巖石によセ枝幹ゆ沖風は撓めゆきく屈曲偃蹇しる
ゆ臥すがめく倒ゆ如く其沖面に俯しるゆ
龍蛇の水に入るとと疑ふ雲はま筆に及ぶべきにあら
ず○凡何國乃沖辺も地よつきたる処ハ沙汀伊齒
とありく清潔形ゆ此に雲大小の嶋くゆ断岸と
なりて多くハ下狹く上廣ごりて崩れんとする形乃
如く或ゆ樹根をあらハし或ハ奇石を出ス雪おとに
ゆ如此なり○此一村ゆ瑞岩寺の所領にして
く殺生戒禁ゆ急鳥の類も人ゆ放て驚ハ
又大奥峠に近づく渓を蹴く躍り出るてうあり夜ゆ
入て音をきく時ゆ殊更幽静に孔を助く○此地

風景の美なる事春夏秋冬をとゝのへ又晝夜昏旦をあらそはこゝに遊人のあつまる所なり中にも夏のなかばを雪れ朝なを見なきゝ里人も目を驚うゝく思ひぬ身をうちく叫ぶんとす誠に人間のいとべき境界に非ざるかな○毎年七月十六日乃夜大施餓鬼とゝく湖上に百八の燈籠を流し遠近群聚して是を見る其光湖を涵し天を照らし数多の篝火の流るゝに随て或ハあらハ或ハかくるゝさまなどいふべき詞なし

○長老坂　仙臺城下より松嶋に入る道に三丁餘の坂有式家ゆきてめぐる松嶋の湖面を見る昔端岩寺臨齋開山法心上人松嶋に下りたまふ時式家にて衣をめされたる故長老坂と名付くといふ　式部の屬僚の祖に僧位ありたまひしを崇して長老とゝぶ

按ずるに今眺浪の字を用ゆ式所湖上幾眺望をはゆゑなを名づくといふを好事の文士附會するなるべし或ハ坂長く疲労ゝゝく身老るかに出老とゝぶくと云も附會乃説なり

○西行もどし松　長老坂右の傍ら山上にあり俚俗の説ハ西行　鳥羽院の北面乃士なり密ゝ宮女ハ通せしが是女房ゝなきばいの出ぬと云ゝに西行其詞を解せず僧となり諸國を巡りて爰に至る乃の傍松ハ下ゝ牛に草

う翁ありて牛飼ざるをあこがるるを罵りけるに
爲の出ん我ゆく翁は同じく伊勢の御阿漕ぐらに
ひく網も度うきなきばあるはれぞするとゝふ言を以て答ふ
西行耻ぢ式部より聞きり依て爲行もどりて松ぞゝふ
翁を即松嶋の明神なりとぞ
一説に爲行松嶋に来る所の入口にて童子の牛をひく
を見て和歌をよめりける月にそふ桂男れ迎ひ来て
すゝたるむを誰ふるゝん童子きゝて雨をふり
雲もかゝり雨もぬりゝはゝむさゝきたゞ子ゝんん
とよみゝゝゝど西行大に耻て側なる桜を手折るべと
して帰いぬ今その桜ハかきゝ松の大木あり生幸子
を松嶋の鎮守山王権現乃化身也とぞ（仏名なるし乃化身也石
の形に似ゝり僧）

○山王社　松嶋村の鎮也　淳和天皇乃時慈覺大
師江刕坂本に山王を式処に勧請ゝゝふ初ゝ五大堂
天童菴の側にありゝ寛永十九年の夏雲居和尚
そ乃家に移せりと云毎年四月中の申乃日申の刻祭式有
○観音堂　木像の観音恵心僧都の作毎年四月十八日
祭式あり
○天麟院　瑞岩寺の南横町といふ所乃裏に方丈あり

て瑞岩圓福寺と称し承和五年戊午より文政三庚辰まて凡九百八十三年

一説に時に入道旅僧の姿となりて行脚して松嶋に来り給ひ頃五大堂に舞臺あるを能與行ありし

戌時頼も多くの人にまぎれて見物ありしが時の役者はつさなきを時に折おもひを声高く笑ひ

を僧徒怒りて時頼を打擲なとせんとやうしかいひつるに其処戌逃去り奥相窟にかくれ一宿

志ぬひ鎌倉に帰りて坂天台僧を追放し法心上人

を開山とし臨済宗に改め松嶋山圓福寺と名ぶ

くとなふ○按するに又一説に松嶋は天台の開基を

淳和天皇の御時天長五年坂本山王を松嶋

に移し慈覚大師戌別當とし三千坊十万石の供

寄附ありし時に青竜山圓福寺と云　亀山天皇

の御時文永年中に至りて松嶋山圓福寺と云ふ

ふ〻未審○法心上人俗名真壁平四郎僧成

宋の時に入唐し徑山寺の無準と云る僧に従て法

を受け帰国して坂氏をひらけり委しく記るす

元亨釈書東國高僧傳等に見えたり偈あり遠入

徑山分風月歸開圓福大道場法心透得無一物

元是真壁平四郎又彰後撰に見仏上人の和歌とて

蓮性法師松嶋へまうでゝ法門など談じて臥りけるふ
ほうゝゝなる長夜の閑話に迷ふ夕なりとも眠ることも
なむ思ひ捜尋ねん○雲居和尚そもゝ摂津の勝尾
山に住せり　先太守の招によりて松嶋に来りし或
人の傳へゝゝ抱潔なる雲居和尚瑞岩寺ありて夜ごと
に雄嶋の座禅堂へ通ひて観念を修し夜ふけゝゝ帰
りけるゆゑ人和尚を誠んとすゝ最暗き夜をえらびて
道の傍の松の木にのぼりて和尚の臥る枕まちて木の
上より手を出ゝその首を攫るに和尚立とゞまり
て少しも動ずゝ時過ぐるもその侍ゝまてわらし
うばそれ人わが紀ゝ手を放ちて和尚を常のめ
ゝ寺へ帰りぬ後和尚と抱潔のはいぐに
ちづぬるゆゝ夜ふけゝ林ゝ紀を分をはるゝ通ひ
支年月久しゝ忘れたあやしきこゝも有つゝんなど云
しに更みなゝと答へけるものの已がなるこゝあ
んまあるまゝにそまとなくさはぐゝ問ひすもて
小和尚答ゝ小ふゝ或夜おゝゝ乃事ありて久し
く立さで居るが時過ぐるなどそのまゝかは
なるゝ覚へゝまは必若紀人なゞれいるゝ支なる
べしと言ゝと抜

佛殿竪戴拾壹間横拾戴間 棟内記に方丈二十五間十八間 正面に
先太守負山公の尊像甲冑の御製束を法前に胡銅
の正觀音天竺より傳来して往古松嶌寺開基の時
より本尊とし側に毘沙門木像慈覚大師作を左
に二十人乃位牌を安置いたす 負山公殉死の家右
に十七人の位牌みな 義山公殉死の輩之奥の間上
段中段孔雀乃間文王の間菊の間桐乃間墨絵に
鷹に鶴の襖構子合天井欄間乃彫物玄関をまぐくみ
諸國の名匠をあつめて是を造り大襖小襖等の繪
も名高き画工の筆にして巧妙を極め精微を尽せ
皆悉也年中再興の造営なり
○火鈴 瑞岩寺にある什物也高さ七八寸徑四五
寸程もある鈴なり形ちは鐘のごとくして中に舌あり
手に掩る程の紙をもてくみ
水引をもてむすびをく
先手あやまりて井の中に
おとしるとく霧隙あり

昔覚満禅師の時法を修して唐土径山寺の火災を
救ひたてまつる謝礼として径山寺より贈れりといふ
毎年正月元日暁丑の時に塔頭に僧一人これを頸に
うけて両手もてふり鳴して松嶋の村中を巡行せ火
災我禳ふの呪法といふ生吉清響よりて数十丁
の外まても聞ふといふ
一説俚俗の伝に龍宮城より唐土にて傳来したるを
贈りたりと云ふ今按ずるに古き唐山より命令城あ
ゆ孫に鰐渡せ時ゆ金鐸といふ地をふりこれ
を伝ふ生いふすあり生図を見るに此火鈴と同じ
さきば彼方にて作りたる金鐸なるべし
○翁面　これ亦瑞岩寺にあり春日の作と云伝ふ頤ハ
口の脣まで糸にてつなぎ合せたり松嶋寺天台にて五大
堂に舞臺ある時まぐこれを用ゐるとこれ時ハ五六百
年ふり以前の物なり又翁嶋といふ嶋も此面の不思議
にて名ぐくとこれ名ぐくとこれ
右の外ゆも仏舎利又ハ鎌倉二位の尼の足仏上人
ゆ贈りなふ法文等什物数多ありにもら次又寺
中厨の竈ハ邊に火の用心といふを彫る板榜あり
秋葉山三尺坊乃筆迹とて近比先住の和尚ハ

時に去るをかけうり其字體さはぐにうごうう
尋常なうぐ見ゆる故に世の人こぞ賞美も

○朝鮮梅　瑞岩ちれ庭上よ二株の梅あり一ハ紅花
一ハ白花なり其も重瓣にして中よりの葉のみに葩
の間ごとに又少しつゝの葉あり香気も殊にすぐれうり
実ハ三つ四つ又ハ五つ六つを同じ蔕にはなて尋常の
梅子より小〻年よりて十餘も結ぶ事ありされど
老樹なほ故よや年経るに従て実を結ぶ事少くなると
然て　貝山公京鮮よりてうぬひ〻時種を切て爰に
栽させりふと云秘傳花鏡といふ書などにある品字海鶴

八つ房の梅

鶯梅などいふ種類なるべし品字梅を日本にもあり
て毛氏を香を実を形奇なるなに　後水尾帝花香実
といふ號を給ふこなり
○法身窟　無相窟ともいふ瑞岩寺中にある窟也
竪四間戴尺横四丈三尺五寸ばかり最明なる入道式窟に
宿して法心上人と改宗のるを釣むりといふをのち
七八十年過て嵯峨天龍寺夢窓國師此窟に脚して式
外に至り天台止観を講ずる伐聴をふといふ窟の上に
法身夢窓窟は五字の額あり
○經堂　瑞岩寺の内にあり先住通玄和尚建之といふ
○千佛堂　瑞岩寺の内にあり本尊木仏釈迦坐像
長戴尺左右に千体の仏像を四すつ雲居和尚建
立したといふ
○龍月院○護國院○寶珠庵○圓月庵○大光庵
○聯芳菴○法雲庵（以上瑞岩寺左の旁に列ぬ）
○萬松菴○江月庵○青松庵○傳曲菴○紹隆庵
○得住菴（以上瑞岩寺右の旁に列ぬ）
右十三ヶ菴瑞岩寺の塔頭なり
○法雲庵の庭上に石二つあり一は長五尺幅壹尺五寸
一は三角の形三尺ばかりづつ共に昔庵僧覚満禅師此庵

に住せしまはる時僧徒を集め式二つの石へ水を没うけさせるふ事頻なりしれば何故と問しに庵主徑山寺丹火災にのり我水の印を咒しくさきを救ふなりと狂水を灌ぎてやはり晩景に至て終りぬそ後一二年を經て徑山寺より禪師に書簡を贈て其功を謝し禮物しるし鈴を贈るこきを火鈴と名ぢけて今瑞岩寺まある

○大光菴の玄関に溪自ず二字ぢ書しる扁額あり瑞岩寺先住唐僧明極和尚の筆なり式庵を松嶋ち天台乃時より ほとり古記寺なり昔を當村の内大光山とふ山にあらしを再興の時まそ乃処に移せりとそ

○觀瀾亭　月見崎とふ所ふにのり　太守の清茶屋なり　貞山公　豊臣太閤ゐて伏見法殿を拜受ゐ ゐひて此所に移しし立ほとふ柱そ形柵乃四方面也 案内記ま庵木四つ刻とふ非なり 雨奇晴好四字の額　先太守御山公の御筆觀瀾亭三字ぢ額佐々木文山乃筆なり外圍乃垣に細竹を網代ま組らり紐ゆう四つ打十二あげとふ是ぢ貝玉垣と名づし常にかはまり是を亦伏見法殿より移せしなりこそ 貝玉垣を玉垣ま代るの是也 貝玉垣と云しとふ説あり

梅そるに雨奇晴好の四字そ宋の蘇軾が西湖の詩

に出らう西湖の勝槩庵山にあらく天下第一と唱ふ
松島乃風景も日本にはなくて第一と称せられハ西湖
の秀句我らうく此亭に名づけぬひ〳〵る最面白し

西湖初晴復雨　　蘋軾

水光瀲灩晴方好　山色空濛雨亦奇
若把西湖比西施　淡粧濃抹也相宜

○陽徳院　瑞岩寺の東北にあり　負山公の夫人田村
太膳太夫清顕朝臣の娘をこゝに葬て式をたてるといふ
○獨鈷水　陽徳院のうちにあり昔慈覚大師獨鈷をもて
土地穿られしに清水湧出らうといふ今に大旱にも涸る
るなしとぞ
梅ぞのに天麟院の境内にも獨鈷水といふあるもて
傳ふる所さきと同じくされども昔をその沙汰なけ
れば近頃の事とおもふる
○天童菴　瑞岩寺の東北にあり本尊十一面観音
木仏立像長壹尺夾日の作陽徳院殿不持しぬふ
佛といふ
○宮千代墳　天壹菴の境内にあり高貳尺余めぐり
九尺宮千代といふは童子を葬るる所といふ昔此
ほとりに宮千代といふ壹子あり容顔うるはしを

才性柔和にして尋常よかりきるあるが天より降臨ゆ
るの童子なりとく時の人これを天童と称せ此庵ふ
久しく住るるあゆ菴坊も天童と名づけたりそころ
見仏上人伊勢より日夜法華を讀誦しぬひし坊
宮千代聴受するるり怠らず日坊経て上人と同じく
讀誦せしが其声清らかに正しくきくく人奇異れ
思ひをなせしが上人遷化の後童子も祝なく身まかり
ぬさてこそ此側に勧請しまる鎮守山王の化身に座
あるらんなど人くいひけりとぞ

梅ずはに封内名蹟志より宮城郡南目村宮城野

の戴拾四間東畑中に空地小塚あり里人これを児
墓と號ゆ昔松嶋寺の児宮千代といふ者此野にて
死せ里人憐れこまを埋く塚を築くそ後人乃
夢のふに塚の内にて夢あるをきく　月無雲露
も草枕ふ宿のりく　といふて嘆くもかくあるを
久しかりしが松嶋寺の徹翁といふ僧ゆく　そも
ころそれよ宮城世の系　といひけまバ後ゆ止ら
とぞ又ある人乃説に宮千代宮城世より来りく和歌
の上乃句を得て下れ句我ゆぞ久しくあんずらず
らひ終よ病となりて身はうぬ遺言にらりてその

左死骸を宮城野に埋むと式二説に拠るに宮城代
乃墓ハ宮城野にあるを信とすべきに似たれども
皆俚俗に伝ふる所にして孰を是と定めがたし
○松嶋明神　今ハ松嶋より北の方高城といふ駅の西
にあり紫明神といふ昔ゝ玄蕃の内蛇が嵩といふ所
にのぼりしが此處　貝山公の功臣山岡志摩守光元人
の賜ひしより在所となるが數代の後に故ありて光元
家断絶志けるに蛇が嵩居住の人民を彼離散してけり
光元言城駅に移りしる者多かりしかば本土の神祠
なきばとて松嶋より乞ひ受て今の麦に祭ほとしふ今
蛇が嵩に梨木明神といふあり即往古松嶋の神の右
に跡なり
一説にゝ桂嶋にあはの神ゝ即古の玄蕃明神なり
とふゝ非なり
○御舟蔵　太守の御座船多數艘あり松嶋より高
城へ通路の左右に水主町とて數十軒ありて是を司る
時く船乗の稽古あり
○正海壇　正海壇が峯とふ麦にあり天台の僧正海
とふ人の墓なりとふ高六尺周六丈ほどなりされども
今麦里人も知る者なし

○護摩壇　山王山といふ所にあり高三尺ほど四方二尺ほどの大なる窟に十二薬師を建立し護摩修行あり〳〵是をいふ

○法性院　竹の浦といふ処にあり○一華菴　林が浦といふ所にあり○地蔵堂　一華庵の前にあり

○五葉菴　横岡といふ所の山中にあり客殿に五葉庵三字乃額あり黄檗木菴の等なり

○雁金山　沖崎の西南にある二ツ高き峯也雁乃飛ぶに似るゆゑ名づくといふ其下の浦辺に出る処を院ヶ崎といふ其形伏人の腕に似るゆゑ名づくと

一説に所一層が祇崎の轉びるなり又一説に茅野が崎の訛なりと

○あ祇とり山　松崎の西南にあり一説に朱鳥の訛也昔仙人あり〳〵赤紙香を玩し是といふ

○海無量寺　福聚山と称す松崎の内南にあり

大沢といふ所の山乃半腹にあり端岩寺より八十余丁ばかり陸を山路にて嶮岨なり舟にてゆくべし此の庭前より浦上の眺望富山小あとゝず富山を崎くを去くなどめ此寺を近く見る別に一景の勝地なり

○瑪瑙羅漢　寺中に瑪瑙にて作りたる羅漢の小像

数多あり一つ毎にさほくの姿よりて巧工基妙
妙なり昔唐山より船載しくるを瑞岩寺住職雲
和尚肥前の長崎にてくるといふ

○羅漢樹　寺中にあり俗ことを仏のなる木とも
皮を稲柏のぬく葉ハ金松葉に似たり冬を経ても
落葉なしなを実黄赤色よしく俗形に似たり故に
羅漢樹と名ぐく唐山にてもことを羅漢柏といふ
木木曾山中にありいぬまゝ又くさまきともいふ

○達磨堂　るくり上の山の頂にあり俗の俗に達
磨大師さの所にて坐禅しゆふといふ熊耳峯とい
ふ

古に額あり寺中に納む　達磨大師赤衣ハ木
像日本三体と称て片岡和衣八幡城別社とたゞ
三體ありとゞ

○葉山権現　松崎の内西にあり禁山といふ変
にあり真山氏勧請とゝへども年月を考ぬ解脱院
といふ額あり

○葉山清水　葉山にあり水清冷よしく大旱にも
涸ることなしとゞ

○湯の原　葉山の辺に昔ゝ温泉ありしゞ天台
改宗乃後に涸りく冷水となれりといふ数十年前

○八幡祠　五大堂鐘楼の側に小祠あり昔の當所八幡峠といふ処に有〻を寛永十七年十一月武蔵に移されしかとしかるに類聚國史畿外奉勅宮社の部に　舒明天皇三年陸奥國宮城郡松嶋八幡奉勅使早良連惟保時疫といふ此時疫癘流行ずるにより勅使をたてて祈られるるなるべくされば千二百年ばかり以上の古社なり今に毎年七月九日祭式有

○五大堂　江に近き処より小嶋二つあり堂をたて五大尊像を安置し大同二年坂上田村麿東夷征伐ゆくゝ下りのぶ比建立ありのぶ寛慶長五年　負山公刈田郡白石城を攻のぶ時梦の告あるにより同九年冬修覆造営等あり前にうけるる鰐口に乾元元年正月十日草辟入道勧進五郎為武運長久寄附之とあり大同二年より文政三年庚辰まゝ凡一千十五年乾元元年より凡五百十九年

一説に田村麿の時毘沙門をたてに安置し五大尊は慈覚大師の時に至りてこれ建おく寛永毘沙門を飛去ぬひぬ今の庚那といふ所の奥兎岡村南光院といふ修験の処にありとぞ

○御嶋　そも雄岩とうけり又小崎ともいふ　景行帝

の法時日本武尊東夷征伐の時武崎に御舟をとゞめ
休息しゝかふら御嶋と唱といふ
一説に　鳥羽院の御時見仏上人此地に住しゝかゝ
る法力涼く神祇を役使とゝゝ事形ゞ分しゝ
めゝて　内裏より佛像器物ちらびに御衣等と賜
はりしゝより松崎を御嶋と唱ふといふ一山の碑文
にも此説を用ゐらるゝ事どもそきらり以前の古た
歌にも松崎やをゝ海とよゝゝる夏多とれば御崎
の名ハ古た事と見えゝり
○渡月橋　法嶋ハとゝる橋なり長十間余あり古乃
松崎橋ゝ見なるべゝ民部卿忠教の詠に　ふゝ分て
とゝりもやゝび紫の菱咲ける杏しゝ海ハ橋
一説に古の杏嶋橋ゝゝ五大堂になる橋見なり
とゝふゝされどもいづきを證ときべた拠なし　今ゝ
何きの橋よゝ近たあゝに菱ゝなゝゝ又松ゝ多ふ
菱をふゝゝるゝ此外の古歌よも数多ゝ
○稲荷祠　法崎の橋乃あなさになり野太鼓門稲荷と
名づゝ祈る者必霊験なりといふ
○松吟菴　法崎薬師堂の側にあり一山の碑文なる
妙覚庵の舊址ゝゝて見仏上人頼賢和尚などの居ら

き〳〵處なり

○藥師堂

○碑　松吟菴の側にあり高九尺幅貳尺六寸元文元年丙辰七月瑞岩寺先住天嶺和尚の文なり天嶺の師通玄和尚式礼に住せ〳〵ぶ頽破にゝりてその三十三回忌の時に修覆再興せ〳〵などいふことを書つゝ祝〳〵せ文其書共るを飲るに〳〵次

○見佛堂　雄嶋にあり里人これを奥の院とゝぶ元仏上人法華六万部讀誦の道場なり

○坐禪堂　雄嶋にあり圓滿國師こきを建把不住軒四字の額あり

○頼賢碑　雄嶋の内西南の方にあり世の人是を雄嶋の碑といふ碑惣高さ壹丈貳尺臺石乃外さ丈幅三尺六寸五分より巾尺三寸を厚七寸なり徳治三年丁未の春觀鏡房頼賢といふ僧の弟子匡心孤運を師頼賢の徒弟を偽んとゝ立るなり鎌倉建長寺の住僧一山一寧の文并書なり草體を雑くのゝり見るなる書なり文ハ甚だ〳〵といへども典雅にして〳〵一山を庵僧にゝ鎌倉に住持せり昔この妙覚庵に見仏上人住〳〵ぬひ〳〵が頼賢も亦式礼に居く

人々帰依仰く見佛の再世なりといひくるすなど書つゝ祝ふ徳治丁未より文政庚辰まで凡五百七十四年になる

○骨塔　頼賢の碑の側にあり五輪石塔高さ丈一尺三寸圓満函師なゞめく建之洞水和尚再建こゝふ

下に深き壙あり人々死者の毛髪歯骨などをおさむ

○供養佛　雄峰の内前後左右の巖の面に窪堵婆又多仏號法諡等を彫く立るゝ數を尽くまで四方の游客こゝなる事を厭て徒に口ゝ罵るのこゝろ

筆にのせゝ誹戒世に伝ふ予れも〳〵此地幽遠閑寂

にしく海山の靈氣を鍾めるなにちくよ来るものゝ
らび悖悖として感戚発し或を忘れをもおのづ今をもつ
を又も父母祖先を慕ひ亡妻殤子戚かなしむ貴賤
賢愚となく情あるものゝ感ぜざるを感情の
動くに從ひ昔を追ひ本を報ずるあるゝ或
の営をなゆゝ愚民にのゝあゝとするにゝ
び佛教に浸淫して無益の所為をなまさとを
天下溢くとくゝをなゝのゝたゝ此地よりて此
るすをゝるぞ
○鸞生嶋　二つおゝらびゝ似るゝゝ名づく一つハ
あゝ嶋といひ一つをゝたゝ嶋といふ
○屏風嶋　屏風をゝてゝるぬくゝなるゝゝ名づく
○福浦嶋　此嶋に竹多くその外よりつ松よゝハ
らされども挿花筒に作りてゝらくるゝなくといふ
好事の人或を茶杓を作り又を尺八如意等戚
製に又一種乃竹あり尋常にかゝらくゝ中の空な
く木のぬくゝ刀眼釘となくくゝ利用とを又を枝を
もくゝ箸をつくる此処の名地なり松の名にあふ嶋く
乃中に節ゝ出げ此外の緑に栄ゆるをことにめぐ
たゝらめくくにぞ福浦嶋とも名づけくゝなるべく

○毒龍庵　福浦嶋にあり洞水和尚開基本尊不動木佛立像智證大師作弁芸所持の仏と云伝ふ又弁芸の笈といふ物あり高三尺ばかり横壱尺八寸程上下二段にしたりて上段に小さき辯天并十六童子の木像ありそれも三寸ばかりあり表も四面とも に滅金乃銅をぬりて仏像又ハ雲氣等を彫付たりそれ海いにも近代の物よりハ古びと見えたり

○毒竜菴記碑　毒龍菴の側にあり享保十九年甲寅瑞岩寺天嶺和尚碑を建碑文の大意ハ此毒龍庵ハ洞水和尚修行乃地なるゆ近年荒癈

するを修造落成せるにより　太守吉村公に請て来臨あり席上に画師周良をめして洞水の像を画しめ又和哥一首をよみて此景を賞しゆふ又此日に調伏壇の仏数の中より曳出せしなどいふを書つゝ祝ふ文章渋にして沸崎藥師堂の碑よりもふつゝ難し

○坐禅石　毒竜庵の前にあり洞水和尚坐禅しゆふといふ坐禅石の三字を彫付たり

○硯石　福浦嶋にあり長壱尺七寸横壱尺壱寸洞水和尚ゆ習石といひ伝ふ

○調伏壇　福浦嶋にあり時頼入道松嶋寺改宗の時天台の僧徒ここに聚りて時頼を調伏したりしを今に熊野神をこゝに祭るなり

○徳浦嶋　福浦嶋の東にあり

○經ヶ嶋　福浦嶋の南にあり經塚といふあり高さ尺五寸周八尺松嶋寺改宗の時天台の經文を此所にて焼すてゝ塚を築く嶋は名も是にこれらとなふ

一説に是仏上人法華六万部をこゝに埋めるといふ非なり

○五重塔　經ヶ嶋にあり高さ丈貳尺五寸享保年中萬人戒供養とて天嶺和尚建之といふ

○翁嶋　昔松嶋に天台宗の時五大堂の前に舞臺ありて能狂興行せしに翁の面浦上をゝえて此嶋まで飛来るゆえに翁嶋と名づくといふ五大堂より此嶋まで浦上凡七八丁ほどもへだたりて面を瑞岩寺にのこ[illegible]

一説案内記に昔天台の時能興行せし翁の面春日の作ならしゝ故ありて土に埋もれ夜中に光をはなちて此嶋に飛来るゆえに名づくや

いふ
○旭嶋　昔弁天祠ありしといふそれも
跡あり
右雄嶋より旭嶋までを松嶋の八嶋といふ七浦
八崎八嶋といふなり右のうちひ傳うり太の外にも
名ある嶋たのめ〳〵
○毘沙門嶋　昔田村麿毘沙門の像を刻てその
五大堂の嶋に祭りぬひ〳〵ぬ所慈覚大師五大
明王を作りて側に安置〳〵ぬひ〳〵ぬばあは時毘
沙門光を大にしてちて此嶋に飛びうりぬひぬうて嶋
の名とにと云ふ大黒嶋えびす嶋などいふ嶋の名も此
毘沙門嶋乃類にうりて名づけること見えたり
○千貫嶋　昔金賣橘次此嶋に漁して一晝夜の
に銭千貫文の利をはるるうり名づくと云ふ
○大黒嶋○夷嶋○小町嶋○小松嶋○いせ嶋○布
袋嶋○内裏嶋○すゞめ嶋○あぶみ嶋○鞍掛嶋
○鎧嶋○ぶと嶋○牡丹もち嶋○小福浦嶋○九
の嶋九つにそろれく名づく○千部嶋八中ようきを
て二つとなれり○まゝあ嶋
○阿嶋○この子嶋○鳥羽嶋○鴻の巣嶋○堂が嶋
○繪嶋○般若嶋○焼嶋○雁ゐ祝しぬ○塔ぶ嶋

○行人嶋○羅漢嶋○比丘嶋○大蛾嶋
○鐘のけ嶋○折烏帽子嶋○立ゑぼし嶋○鍋嶋
○橋うけ嶋○茶臼嶋○たや舟嶋○引通し嶋○
屋形嶋○せいがんゑ嶋○庫樓嶋○かい嶋（以上大抵松嶋村の内なるべし）○都嶋○筆捨嶋○硯嶋○化粧嶋○
みつの小嶋○離嶋（祠あり）○躾嶋○引嶋○在城
嶋○内裏嶋○石嶋（十二あり）○蛇嶋（以上大抵塩竈のうちなるべし）
○桂嶋（大なる嶋なり内に村里あり）○駒嶋○手代嶋○大言嶋
○小言嶋○沖續嶋○汀續嶋○佐久嶋○鐘ゑま
○舞子嶋○二王嶋（これより以上皆桂嶋という）○月星嶋○松ぶ嶋
○卯嶋（以上の嶋村の内とする）○寒風澤○朴嶋（以二嶋を殊に大なる嶋とする）
（村里多し皆宮風沢という）○宮戸（ことに大なる嶋なり俗生那に属するという村里多し）○
えびす嶋○竹ぶく嶋○舞嶋○彩嶋○百合嶋○
白嶋○さい嶋○毛なし嶋（以上吉田村の内という）○馬放嶋
（塩釜宮の神なるを大明神と号ずるゆえ名づく）○つぐら嶋○鞍嶋○兎嶋○大放火嶋
○小放火嶋○小放嶋○帆たて嶋○蛭子嶋○達
摩嶋○材木嶋（以上手ぶ嶋村のうちという）○高嶋○雀嶋○梗嶋
○權現嶋○なべ嶋○二嶋○東風嶋○西風嶋○
間風嶋○小黒嶋○大黒嶋（以上花淵村の内という）○犬嶋○亀
嶋○つゞみ島○鏡嶋（たゝみ石という）○柳嶋○屋祝嶋

下ぬ一の名勝なれど代々の集に載る古人乃
歌數多なれどおのおのまもらるくしくも歌道聞も
志といふまにまにさう
詩に至りてそれ國風にあらざるゆゑいにしへ人
の賦詩多くうまくて世勝槩よ敵に比し自作を更
にあらず庵主にくれの代乃詩人一絶句のうち

薩天錫

風光招我海山阿　拍手吟魂奈句何
御嶋烟波松嶋月　到茲捲舌富樓那

相模州
田原坊

松嶋や鶴さくまつしまや　木々嵯峨や日本国

或云芭蕉翁此地に来りて風景を賞せしが詞
の及ばざるうを去りて終に一句を残さずして
去りぬるとて家に帰りしなほ得ざる句と
ぞ

▲産物　○福浦嶋の竹　○岩長生　即巻柏なり
○石斛　○雨漏草　即尾芦　○城垣草　即地州骨碎補なり
○寒ぞろ〳〵　麻角菜　○水飴　○茶筅　○紅蓮ちん
ぢん　粳米を製し偏く圓くして満月の形に作り
火にあぶりて果子とす昔此村浪荒須乃百姓掃部

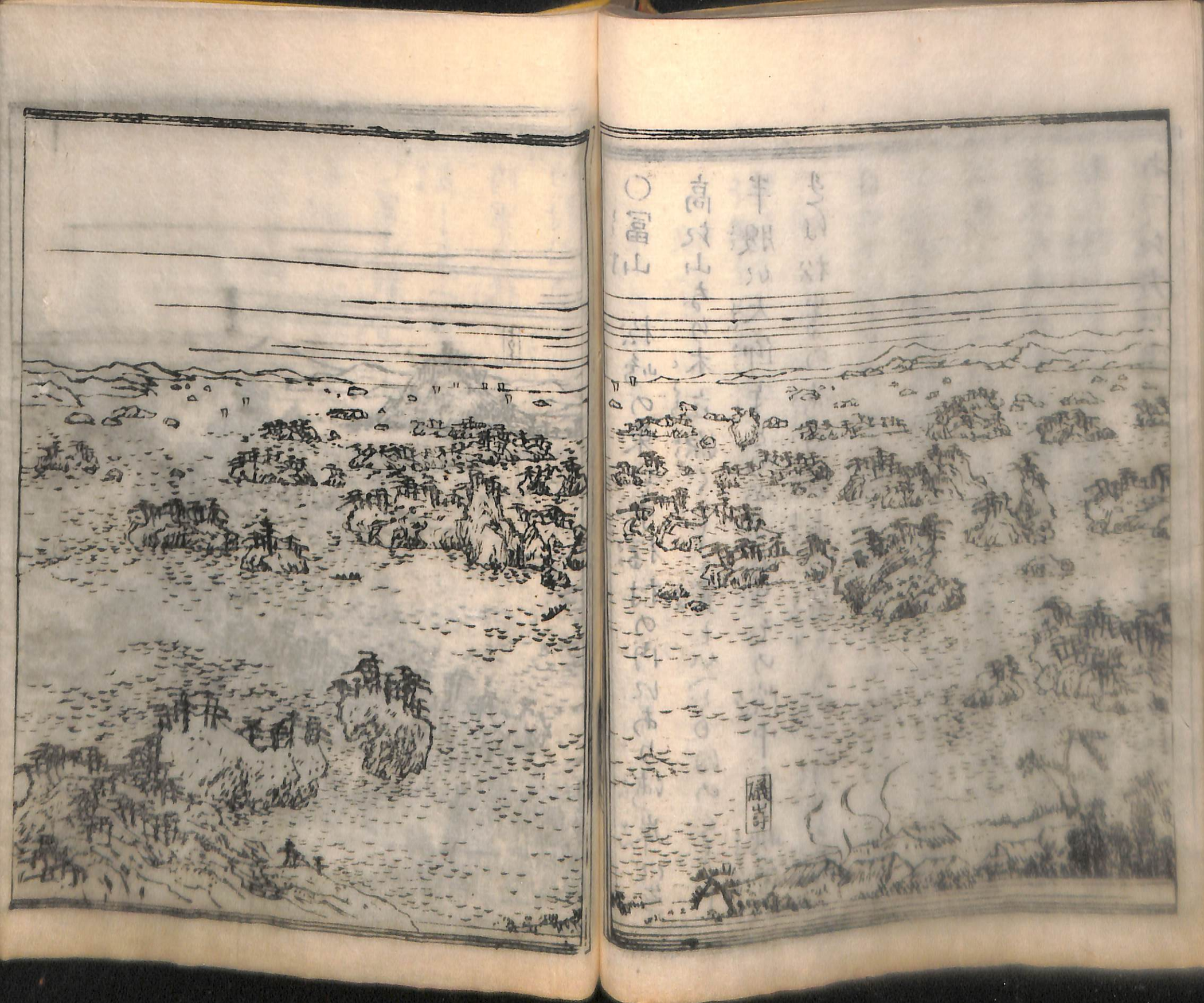
石斛

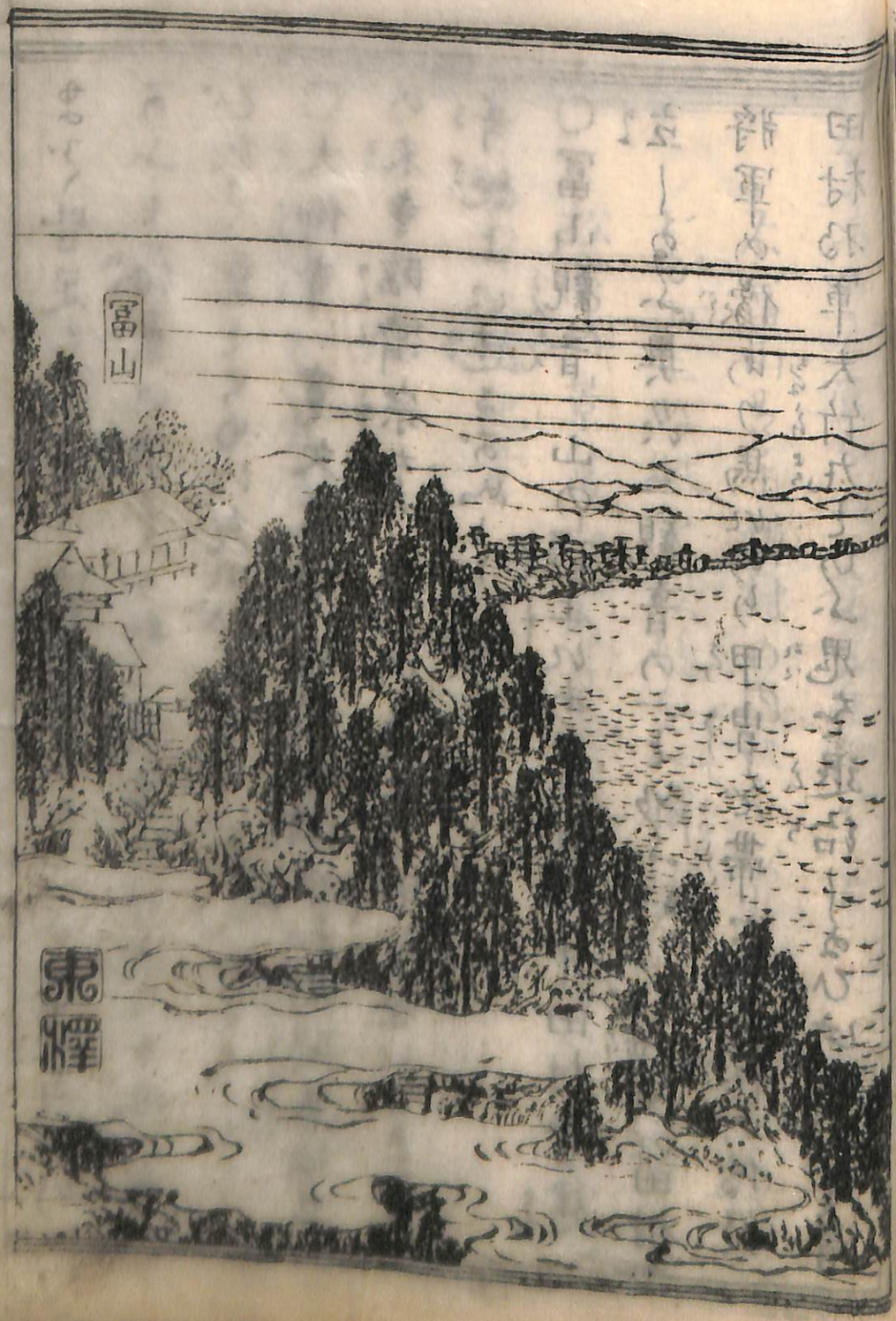
とゝふ者の子小太郎といひしが羽列象浮の人の娘を妻に約しくいまゞ婚義をこのへざる前に小太郎病よく死しけるば妻女は髪をたり剃髪しく江蓮比丘尼と称し瑞岩寺の南に庵をむすび此果子をんとゝて賣るを紅蓮ちんぞいと名づく今心月菴といふ寺ゝその住居せし跡なりとぞ果子を今も作りて賣る処あり此村の名物とす

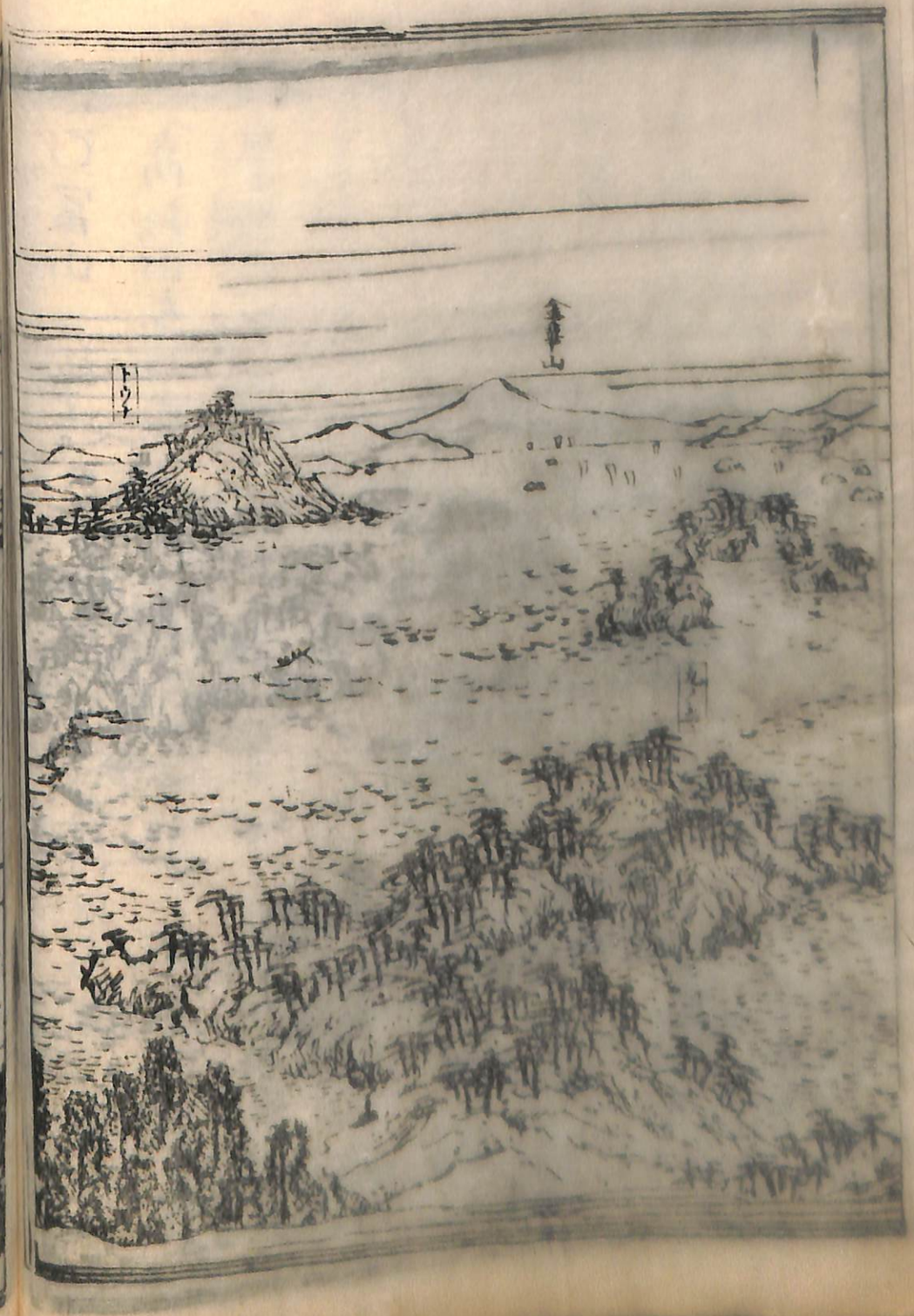
△路程　江戸より松島まゞ丑の方九十九里○仙台城下より丑寅の間六里半○千賀の塩竈方

北の方戉里半海陸ともに里数同じく海岸を必
舟路を通るべし奇観なり陸路もまた峻嶮
を為す○利府驛（仙基城下より丑寅の方戉里半）より丑寅の方戉
里半
松嶋より高城驛まで丑の方半里○同富山まで
寅の方戉里（舟にて四くるまを里　わたの陸路なし）○同金花山まで寅卯
乃間二十里（海上もはし里数なれども松嶋より直ちに四く
舟をやとひ庚那といふ所まで漕ぐべしとまた風波
穏なる気）○同石の巻まで八里半

○富山　松嶋の東北手樽村の内にあり海岸に出て
高き山なり木立深くして畫とんへどもなのくらし
半腹に大仰寺といふありその院中より眺望に
まさる松嶋の海面庭上の泉水のぬく浮める嶋
目の下にちらくと松乃緑を手に掬むべしと云る
実風景詞のたとふべきにあらずあれに古より松嶋の
風景を富山にありと云ふを余遠近の眺望に東南
遥に大海の天と一色なるを左の方遠き右は相
馬の諸山より近き庚那の二ツ森まで数百里の極
おつたに遠きを金花山ちらきを日和山にいる




富山


トウヤ
金華山

まぐ皆足をあげてふむべしとおもはる又漁舟の沿うふを落葉の流るゝぐぬく塩屋のけむりも風になびたく雲とともにたゞびくさはいとゝうとゝ

○大仰寺　寛文年中瑞岩寺洞水和尚開基瑞岩の末寺臨濟宗なり此寺の屋上乃眺望世にまれなる奇絶上に述るごゝし

○富山觀音　山の頂上にあり大同年中田村麿建立しゝふ奥州三觀音の一とゝふ牧山　富山　箆岳　側に田村將軍の像あり馬にのり甲冑を帯せり俚俗の伝に田村麿の軍大竹丸といふ鬼を退治しゝひ此変化骨をうつめゝ堂をたゝゝゝふとゝふ

右富山より手樽村の内にて松嶋の北にあゝ故ども山上の眺望松嶋を一瞬に見たゝしゝく昔より松嶋の景富山にありといひなゝハせるにより聊たゝに附記せ

文政三年庚辰四月　仙臺　鼓岳子述　東澤圖

松嶋圖誌　終

文政四辛巳年七月出版
明治二十一年七月三日印刷
明治二十一年八月廿五日再版

定價金拾八錢

著作者　故　櫻田周輔
發行者　宮城縣平民　白木暦
仙臺市國分町百四十四番地
印刷兼　仝
發兌者　山水富四郎
仙臺市國分町
發賣書肆　有千閣

東京學士會院圖書之印

大賣捌所

松嶋物産店　宮城縣宮城郡松島村松嶋　淺野甚之助
仝　仝　支店
休宿所　仝　觀月樓
休宿所　仝　鈴木屋峯治
松嶋物産店　仝　鈴木長藏
仝　仝　千葉善助

書林　宮城郡塩釜町　鈴木才治
仝　仝　一貫堂
旅人宿　仝　海老屋藤藏
休宿所　仝停車場前　仝支店
休宿所　仝停車場前五巷　淺野屋支店